

日蘭交流400周年記念事業「デ・レイケ記念シンポジウム」 文明を支えるもの～日蘭の厳しい国土条件と社会基盤～

Report of the Johannis de Rijke Symposium 建設省近畿地方建設局企画部建設専門官 佐中 康起

日本とオランダとの交流は、西暦1600年にオランダ商船「デ・リーフデ（博愛）号」が現在の大分県臼杵湾に漂着したことを始まりとして、今年で400年を迎え、日本及びオランダの各地で400周年記念事業が実施されている。日本での行事は、4月19日から26日までの「オランダ週間」を中心に行われ、明治時代の淀川改修、大阪港築港など、我が国の近代化に多大な貢献をした、オランダ人技術者デ・レイケを記念した「デ・レイケ記念シンポジウム」も主要行事のひとつの国際シンポジウムである。

本シンポジウムは、4月21日と22日に、当時のオランダ人技術者による築港が今日の繁栄の基礎となっている大阪南港のアジア太平洋トレードセンタービル（ATC）において開催したものである。

1. はじめに

日本とオランダの両国は共に、高潮や洪水という自然災害を受けやすい低平地に多くの人口・資産を抱え、厳しい国土条件を克服するよう社会基盤整備にたゆむことなく心血を注ぎ、今日の繁栄を築いてきた。

そこで、「低平地に文明が展開し社会生活が営まれている両国において文明を支える社会基盤を広く考える」ことをテーマとした国際シンポジウムを日蘭両国が共同で開催し、両国の新たな交流のスタートとしようとしたものである。

本シンポジウムには、ウィレム・アレクサンダー皇太子殿下をはじめ、オランダの運輸・公共事業・水管理省のデ・フリーズ副大臣、官民にわたる土木技術の専門家、デ・レイケ、エッシャー両氏の御子孫などオランダから100名あまりの方々にお越し頂くことを得、そして1,000名以上の方々に参加して頂くことができ、大成功裏に終えることができた。

なお、シンポジウムの実施は、オランダ総領事を名誉委員長に迎え、建設省近畿地方建設局長を委員長とし、建設省近畿地方建設局、運輸省第三港湾建設局、大阪府、大阪市、土木学会関西支部、オランダ大使館・総領事館を構成機関とする「デ・レイケ記念シンポジウム」実行委員会を組織し、事務局を近畿地方建設局企画部と（財）リバーフロント整備センターに置き運営を行った。



写真 - 1 委員長挨拶

2. シンポジウムの概要

シンポジウムの構成としては、次の2部構成とした。

- ・1日目(4月21日)
「特別講演、パネルディスカッション、記念講演」
一般市民を対象とし、前述のテーマを幅広く考える場とした。
- ・2日目(4月22日)
「ワークショップ」
行政・大学・民間の土木技術者を対象とし、文明を支えるインフラを創り出す各種土木技術の交流を行った。

シンポジウムプログラム

4月21日(金)

開会式

特別講演

「ふたたび大航海時代へ～日本とオランダを結ぶ～」
東京大学名誉教授 木村尚三郎

パネルディスカッション

「文明を支えるもの～日蘭の厳しい国土条件と社会基盤～」

パネリスト

杉本 苑子(作家)
川勝 平太(国際日本文化研究センター教授)
津田 和明((社)関西経済連合会文化委員長)
レイニアー・H・ヘスリンク
(東京大学史料編纂所外国人研究員)
藤芳 素生(建設省近畿地方建設局長)

コーディネーター

藤吉洋一郎(NHK解説委員)

特別講演

「日蘭のかけはし」

運輸・公共事業・水管理省デ・フリーズ副大臣

記念講演

オランダ王国皇太子殿下

4月22日(土)

ワークショップ

セッション1

「低平地における水防災」

セッション2

「水環境と河川利用」

セッション3

「地下建設(トンネル)」

セッション4

「沿岸域整備」

デ・レイケ、エッシャー御子孫紹介

特別講演

「オランダ人技師デ・レイケとエッシャーの業績と足跡」

東京大学顧問研究員 上林 好之

クロージングセッション

以下にシンポジウムの概要を紹介する。

- (1)木村尚三郎東京大学名誉教授の特別講演(「ふたたび大航海時代へ～日本とオランダを結ぶ～」)

日本もオランダも海に面した国であることは共通しているが、日本は「周りが海に囲まれている」という意識だ。日本もヨーロッパのEUにならい、人と人の接点、交流を大切に、大航海時代に向けて「周りの海に開かれている」海洋国家という意識を持って21世紀に向かっていく必要がある。

- (2)パネルディスカッション(「文明を支えるもの～日蘭の厳しい国土条件と社会基盤～」)

日本と西洋文明との出会いと社会基盤整備に貢献したオランダ人技師デ・レイケの業績並びにデ・レイケから学んだことを振り返ることからはじまり、デ・レイケをはじめとする土木技術者を生んだオランダと日本の低平地という厳しい国土条件の共通性に話題は展開した。

その後、21世紀の社会基盤整備へと議論が移り、こ

れからの社会基盤にとって大切なことがパネリストからキーワードとともに語られた。最後に日蘭両国で厳しい国土条件下に文明が発展してきた背景には、たゆまぬ社会基盤整備があり、21世紀に持続可能な世界を実現させるためには、今後も交流を続けていくことが必要と確認された。



写真 - 2 パネルディスカッション全景

- (3)デ・フリーズ運輸・公共事業・水管理省副大臣の特別講演(「日蘭のかけはし(Remarks on the Bridge between Amsterdam and Dejima)」)

オランダ(Nederland=低地)は水管理なくしては成り立たず、水管理がないと国の半分は水中に没してしまう国であるが、その中で我々は沼地に非常に生産的で繁栄する国をつくることに成功した。

洪水の絶えざる脅威の経験から、我が国は水管理のノウハウを発展させ、現在では水管理の専門的知識に



写真 - 3 副大臣の講演

において世界の重要な位置にあり、地球上のいたる所で複雑なプロジェクトに携わり、その専門的知識を輸出している。

本シンポジウムは、日蘭両国間の知識の交換の長い伝統の一部をなすもので、日本と世界を結ぶためオランダ人が果たしてきた「かけはし」の意義をもっている。

(4)オランダ王国皇太子殿下の記念講演

オランダの近代的な水管理では、治水・利水・環境を一体的なものとして管理するよう法的にも整備されている。自然な水の流れを理解することが大切で、強大な技術の力でコントロールしようとしてはいけない。長期的にみるとオランダのような低地国の戦略としては、自然と闘うのではなく、自然の力を自分達に有利なように利用することが大切で、日本の柔道と似ている。

今年の3月に第2回世界水フォーラムをオランダで開催したが、2003年には第3回が日本で開催されるにあたり、オランダが得た知見をデ・レイケの伝統に則り情報の共有化のお手伝いをし、大いなる成功と二国間の友情の絆を強化できることを祈念する。

講演の後、オランダの水管理者が大切にしている水管理の伝統のシンボルである「築堤職人」の像が皇太子殿下から岸田建設政務次官に「新しい水管理と友情」のしるしとして渡され、また、世界水フォーラムの鍵も引き継がれました。

(5)ワークショップ

低平地の社会基盤整備に関する最新技術について、日蘭両国の19名の専門家を迎え4つのセッションを平行して開催した。

・セッション1（「低平地における水防災」）

今本博健京都大学防災研究所教授とトロンプUNEPオランダ代表をチェアマンに、情報の交換と共有化がなされた。

日蘭両国の洪水防災の長い歴史の中で、日本は「河川」に、オランダは「河川と海洋」に焦点が置かれているが、両国の河川にはまったく違う性格があり、オランダは川幅が比較的広く、勾配も緩やかで土質と地下水が水防災システムの重要な役割を持つのに対して、日本は急勾配であり、それによって堆積土が大量に運ばれ洪水につながりやすいという性格を持っており、土砂管理が重要な意味をもつ。

オランダでは、教育により洪水に対する安全対策には限界があることがよく理解されており、洪水防御の新しいアプローチとして、洪水が起きたときの帰結を考慮に入れ、洪水の頻度を決定している。受け入れられている安全基準を生起確率で表した場合、日本が200年に一回なのに対し、オランダでは1万年に一回と大きく異なる。

洪水防御の観点から「河川にゆとり」を与える方法として、オランダでは、引堤により氾濫原を広げるとともに、河川の浚渫・氾濫原の掘り下げと、河床や氾濫原に対する規制によるアプローチの状況紹介。日本での地下河川・公園、あるいは地下の駐車場を余分な水の貯水池・遊水地として土地を三次元に活用する方法や、堤防の内側を全体的に高くする高規格堤防により、河川にゆとりを持たせる取り組みの紹介。



写真 - 4 皇太子殿下から政務次官への像の贈呈と鍵の引き継ぎ



写真 - 5 築堤職人の像

さらに、教育の重要性が議論され、政策を実現するためには、小学校の段階から、洪水防御に対する教育が必要なこと。また、国民の参加も重要で、政治が意思決定するためには、流域に住む人たちになぜこうした方策が必要なのかを、議論の段階から参加できることが必要であると紹介された。



写真 - 6 ワークショップに参加されたデ・フリーズ運輸・公共事業・水管理省副大臣

・セッション2（「水環境と河川利用」）

村岡浩爾大阪大学名誉教授とスターブCUR所長をチェアマンに、情報の交換と共有化がなされた。

両国にとって河川は重要な自然のスペースであることを基本に、自然豊かな河川空間の復元と創造について、日本の状況として、健全な水循環の形成・自然の力を活用した多自然型川づくりや都市河川の再生等の紹介。

両国に共通した認識とアプローチとして河川技師・生物学者・生態学者・材料の専門家など異なる専門分野の専門家の川づくりへの参加や住民の参加・連携の必要性。

オランダでの取り組みとして、環境に配慮した浚渫並びに浚渫土の活用による自然景観の創造、堤防内の自然の創造として環境に配慮した堤防整備。また、自然開発プログラムとして、川幅を広げることによる自然の湿地の創出とともに、航行路の改良が運搬手段としての舟運にプラスになり道路交通からの排出物質の抑制に役立つことや、民間事業者による土砂の採取による航路等の持続的な発展等についての紹介がされた。

・セッション3（「地下建設(トンネル)」）

足立紀尚京都大学教授とシュホルテンオランダ運

輸・公共事業・水管理省ザイトホラント管理局マネージャーをチェアマンに、トンネルの安全性、最近のシールド・沈理工法、トンネル空気力学、並びに地下利用等について報告がされた。

・セッション4（「沿岸域整備」）

黒田勝彦神戸大学教授とダングリモンデルフト工科大学教授をチェアマンに、コンテナ輸送と港湾整備、港の経済・生活環境・自然環境、浚渫と埋立、地盤沈下と液状化、土砂の管理等について報告がされた。

(6)上林好之東京大学顧問研究員の特別講演（「オランダ人技師デ・レイケとエッシャーの業績と足跡」）

特別講演に先立ち、シンポジウムにお越しいただいたデ・レイケとエッシャーの御子孫の方々を紹介し、日本の社会基盤整備の礎を作った両氏の業績に対し、盛大な拍手により心からお礼の気持ちを伝えた。

特別講演では、「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」という本を最近書かれた上林氏に、デ・レイケ、エッシャー両氏の日本における業績、及び両氏の長年にわたる交流について詳しく紹介して頂いた。

(7)ポスターセッション

シンポジウム開催中の2日間、両国の文明を支えるインフラを創り出す土木技術の最新情報(行政施策・学術研究・民間技術)について、多数の行政機関・公益法人・民間企業の参加を頂き紹介した。その中には、デ・レイケコーナーを設け業績の紹介も行った。

3. あとがき

30年もの長きにわたり、日本の社会基盤整備にあたったヨハネス・デ・レイケの業績とその精神は、国際交流・国際貢献のひとつの姿として、日本とオランダのかけはしとして、その輝きを失うことはない。

災害を受けやすい低平地という厳しい国土条件下で、「世界は神がつくり給うたが、オランダはオランダ人がつくった」という自負を象徴する「築堤職人」の像を見た時、文明という表舞台を支える社会基盤整備に携わる人に対するオランダの人々の深い畏敬の念と社会基盤整備に対する関心の高さを感じ感銘を受けた。

そして、堤防神社があり、堤防祭りが行われている堤防整備の遅れている日本の川のことを思いだした。地震・火山・洪水等自然災害の脅威に常にさらされて

いる日本でも、社会基盤を大切に管理し、将来の世代に引き継いでいくとともに、文明の発展を支える社会基盤整備を国民と一緒に進めるよう、一層の努力していかなければという思いを強くした。

最後に、本シンポジウムの実現に際して頂いたオランダ大使館・総領事館の皆様の献身的なご尽力や、実行委員会の各機関の方々をはじめ、シンポジウムの運営を陰で支えていただいた(財)リバーフロント整備センター等の多くのスタッフのご協力に心から感謝したい。



写真 - 7 デ・レイケ、エッシャー両氏の御子孫



写真 - 8 金盛土木学会関西支部長の閉会挨拶



写真 - 9 デ・レイケコーナー風景



写真 - 10 ポスターセッション会場風景